参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「ワイズ・スペンディング」
著者 / 所属	小松　康志 / 決算委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	476 号
刊行日	2025-7-14
頁	2
URL	https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/20250714.html

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください（TEL　03-3581-3111（内線 75013）／ 03-5521-7686（直通））。

視点

ワイズ・スペンディング

決算委員会　専門員
小松（こまつ）　康志（やすし）

説明なしにタイトルに用いても差し支えなかろうと思えるほどには、ワイズ・スペンディングという用語は広く浸透している。しかし、この語を明確に定義せよと言われると言葉に詰まる。エコノミストの熊野英生氏は率直に「筆者にはワイズ・スペンディングの実像が何であるのかわからない。」と述べており、人により解釈が異なるのはワイズの部分に価値判断のばらつきがあるが故との趣旨の分析をしている（熊野英生 第一生命経済研究所 経済分析レポート 2009.4.23）。ワイズ・スペンディングを二つの類型に分類、定義すると、①EBPM型と②経済成長型になるとのレポート（金木利公 三井住友信託銀行調査月報 2021.7）もあり、①は「エビデンスに基づく分析と政策の立案（EBPM:Evidence-based Policy Making）がなされ、その結果、費用対効果で見ても、生み出される利益や利便性で見ても、政策効果が高いと判断された財政支出」、②は「一国経済の中長期的な生産性、ひいては潜在成長率を引き上げるための財政支出」とされている。

政府は、ワイズ・スペンディングをどのようなものと考えているのだろうか。「経済財政運営と改革の基本方針」（骨太の方針）での使われ方を見てみる。初出は2015年。以後、最新の2025年まで11年連続で使われているが、その意味合いには変遷があるように思える。2015年には、「政策効果の高い歳出に転換（ワイズスペンディング）」と「長期的な成長を見据えたワイズスペンディング」の２箇所で用いられており、上記の①と②の両方の意味合いが並列している。2016年には「経済再生と財政健全化に資するよう、ワイズ・スペンディングの仕組みの強化を進める」など12箇所にあり、明確ではないものの①と②の両義に用いられているように思える。それが、2024年には７箇所中６箇所、2025年には４箇所中４箇所でEBPMと結びつけられており、直近２年は①の考え方に寄っているようである。

変遷の理由は不明であるが、考え方が収斂しつつある（ように見える）ことは好意的に捉えておきたい（②はワイズ・スペンディングの提唱者とされるケインズの考え方にのっとったものであり、これが誤っているということではない）。定義の曖昧さは、用語のマジックワード化を招き、ワイズ・スペンディングと言えば異論が封じられる思考停止状態につながりかねないからである。

少なくとも政府において、何がワイズなのかがエビデンスに基づき判断されるのならば、事後の検証は不可欠である。それに関連して、今期決算委員会の審査を通じて感じたことを２点付言したい。一つは、政策目標の達成期限が明確でなくてはならないということである。期限を定めないと、成否の判断を無限に先送りできてしまうからである。もう一つは、検証の尺度を（特に施策実施者と評価者の間で）同じにすることである。尺度をずらして、KPIを良好に見せるのは、「賢い」ではなく「小賢しい」と批判されるべきであろう。